

狭山にゆかりのある文化人紹介 その10

つむら せつこ
津村 節子 作家

1928(昭和3)年～

1. 経歴

福井市にて誕生。病弱だった氏に、母はグリムやアンデルセンの童話集などを買い求め、読み聞かせた。氏は、少女倶楽部より少年倶楽部が好きで、探偵小説などに心躍らせた。またノートに日々の出来事を書くことを楽しみとしており、漠然と「自分は体が弱いため普通の生活ができないから家で小説を書いていきたい」と思うようになる。

母は、津村が9歳の時に死亡。13歳、東京府立第五高等女学校に入学。しかし、戦争が激しくなり母の実家を頼って疎開。16歳、父は福井にて心臓麻痺のため急死。

学習院女子短期大学に進み、大学の文芸部で吉村昭氏と出会い結婚する。その後、夫婦で作家活動を続ける。

37歳、「玩具」で第53回芥川賞受賞。女性の芥川賞受賞者としては6人目。平成28年文化功労者として顕彰される。



書斎にて 1992(平成4)年

2. 狭山市とのかかわり ～著書「星祭りの町」より～



昭和29年(現在の入間川3丁目)

「狭山は第二のふるさとです」と述べる津村氏。空襲を逃れて母の実家のある入間川町に、祖母と姉妹3人の女世帯が疎開する。自伝的小説「星祭りの町」には当時のことが生き生きと綴られている。

敗戦の非常な衝撃、航空士官学校がジョンソン基地に。米兵への恐怖、ジープに乗って嬌声をあげる娼婦たち。氏は目黒の焼け跡に建てられたドレスメーカー女学院に通学。姉と共に町の大通りに洋裁店を開く。店の前には、呉服店や雛人形店、洋品店などが寄り合って開いたスーパーショップ。七夕祭りに参加して、ウェディングドレスを着せた人形を吊るして話題になった。稻荷山、入間川の河原、八幡神社等、当時の入間川の町の様子も多く描かれている。

3. 特筆

ジュニア小説から短編・長編小説と多くの作品を発表し、女流文学賞、文部大臣賞、川端康成賞、菊池寛賞等々を受章している。氏は、歴史や芸術、伝統産業などの中で生き抜く女性たちを書き続けてきた。逆境に見舞われながらも、自らが選んだ道をひたむきに歩み続ける人々の姿が力強く描き出されている。平成30年、90歳になって「明日への一步」を発刊する。題名について「現状に満足していたら先がない。現状より上の所へいきたい。一步でも先に進めたらいいなあ」と述べている。(インタビュー映像より)